

深江文化村・古澤家住宅の解体と展示

史料館長 大国正美

はじめに

深江文化村にあった古澤家住宅（国登録有形文化財）が、令和五年（二〇二三）十月に解体された。当初十三棟あった住宅は富永家住宅だけとなつた。史料館では所有者の古澤弘氏（昭和三十四年生まれ）に接触、神戸市文化財課を交えて話し合いを重ねた。その結果、行政としては部材の保存ができないとう判断に至り、史料館で残された部材をできる限り譲り受けることになつた。また六枚残された設計図は文化財課がデジタル保存し、現物は史料館に寄託された。特別コーナーを設けて常設展示している。今回の調査成果を報告したい。

ウクライナで学んだ建築士が設計

深江文化村は大正十三年（一九二四）、深江の医師阪口磊石が所有する神楽新田（深江南町一丁目）の約二五〇〇坪に設けられた。提案したのは、ヴォーリズ建築事務所出身の建築家で、深江在住の吉村清太郎だつた。十三棟の建物が内側にあるローランドに向き、これを軸にコミュニティを形成する特殊な構造になつていて。吉村の建てた建物に統いて、大正十四年に建てられたのがウクライナの現キーウ（キエフ）工科大出身の L.N・ラディンスキイが設計した古澤家住宅だつた。施主の古澤

平作は、ラディンスキイの事務所と同じ神戸・旧居留地の明海ビルにタイヤを扱う古澤平作

商店の事務所を置いていた。

その縁で建築

を発注したとされ、

ラディンスキイも

深江文化村に邸宅を構えた。

古澤家住宅は木

造二階建てで、複雑な構成を持つ急傾

斜の天然スレート葺きの屋根が特徴

だつた。壁面には大型窓を配し、明るく

変化のあるデザインが特色だつた。屋

内は、一階は食堂・応接室（写真1）。



写真2 二階の和室



写真1 応接室の暖炉

女中部屋があり、いずれも洋間。二階は和室の寝室（写真2）と、ドアのある和洋折衷の畳敷の部屋があり、日本人の生活に合わせて造り分けていた。屋根裏に入ると小屋組みがしっかりとボルトで止められていて、阪神・淡路大震災などの災害に見舞われたが、損傷は少なかった理由が判明した。

部材の調査と展示の概要



写真4 テラス



写真3 応接室の観音開きの窓

部材の譲渡を受け、史料館では二階の深江文化村の展示コーナーを手作りで大幅に増強した。目玉は、ビザンチン風の意匠を持つ階段の親柱と手すり。金目地風の円形や直線の飾りはロシア正教の聖像に使われる色遣いである（口絵写真）。また階段下に設けられた物置の木製ドアも屋内で統一的に使われているナラ材が素材に使われてい

（写真1）、マントルピースの火床、ガラス製ドアノブ、フック式のドアのかぎ、襖の金具、玄関ドアの色ガラス、玄関やテラス（写真4）のツートンカラーのタイル、外壁、和室の天袋引戸など、細かい素材にこだわった。一階の壁紙はめくると三層構造になっていて、一番下には大正五（六年ごろの年号）のある反故紙が使われていた。そのことで一番下の壁紙が建設当時の壁紙で、その後二回にわたって壁紙が張り替えられたことも分かった。

追跡調査で製造元が分かった部材もある。浴室タイルの裏には「DK」のマークがあり、調査の結果、淡路にある淡陶株式会社製と確認された。Danto Tile 淡路島工場技術研究所の深井明比古上席研究員によると、淡陶の「D」と会社の「K」のイニシャルで、大正十四年は淡陶の阿万工場と福良工場が稼働しており、いずれかの生産品という。深井上席研究員の分類によれば、C4タイプで、生産時期は大正時代中頃と考えられ、古澤家が大正十四年竣工なのでタイルの生産時期と少し差が出るという。ただ生産記録もなくストック品を使用することもあり、建築年代のはつきりしている建物とタイルの関係

る。大正期の手作りのガラスの入った応接室の観音開きの窓（写真3）は丸ごと取り外し、カーテンレールを取り付けた。ガラス越しに在りし日の写真をちりばめている。天窓も別置し、手作りのガラスによる反射の搖らぎが味わえる。

を示す貴重な史料と判明した。

天然スレート葺きの屋根は組み合わせて一部を復元した。建物の基礎に使われていたレンガも回収。今回解体時の調査の結果、レンガの基礎に加えて分厚いコンクリートで基礎が補強されていたことが分かった（写真 5）。そのことが阪神・淡路大震災の揺れにも耐えられた理由だろう。大正十二年に起きた関東大震災を教訓に耐震を考えた設計にしたのだろうか。

建築当時の写真も収集

今回の調査では、大正十四（一九二五）～十五年ごろ撮影した棟上げの写真（写真 6）、竣工後の家族写真（写真 7）が含まれている。これまでほとんど公開されていない貴重な写真資料である。

またアルバムの中には施主古澤平作（写真 8）や暖炉前のソファに腰かけた外国人の写真があり設計者のラディンスキーやみられる（写真 9）。川島智生・神戸情報大学院大客員教授によると、ラディンスキーキーは一八八一年生まれのロシア人で、ウクライナのキーウ（キエフ）工科大で建築学を学んだあと、一九一九年～三二年ごろまで神戸にいたという。しかし詳しい経歴や活動の詳細は不明。風貌も知られていない。

古澤家住宅を建築した古澤平作の長男一は昭和十一年に十七



写真 5 レンガに加えて分厚いコンクリートの基礎

歳で亡くなっているが、生前ラディンスキーエ邸を描いた絵画を残している。この絵画も寄贈され公開している。古澤一は写真撮影も趣味で、自分で撮影したアルバムを残していることも今回判



写真 7 竣工直後の庭での家族写真（上）と景観（下）

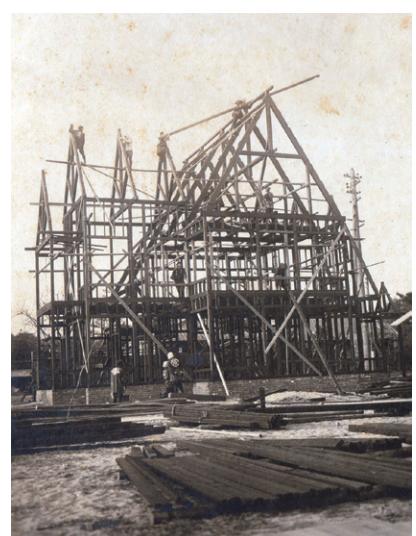


写真 6 棟上げの写真（大正 14 年 4 月）



写真9 設計者のラディンスキーとみられる写真



写真8 施主古澤平作

明した。焼付サイズが小さいものが多く不鮮明な作品が多いのが残念だが、ラディンスキー邸を撮影した未公表の写真（写真10）が含まれ、これも今回の調査の大きな成果で、併せて展示している。設計図と完成した建物とは一部食い違いがあり、今後的研究課題である。

文化財として高い評価の一方で支援薄く

平成十年（一九九八）十月に国の文化財審議会が古澤家住宅の主屋と付属屋を国の登録有形文化財とするよう答申した。登録有形文化財（建造物）は、阪神・淡路大震災をきっかけに、建造物の緩やかな保護に向け、平成八年に導入された。築五十年以上の優れた建築物が対象で、このとき兵庫県内でともに登録文化財になつたのは神戸市中央区の異人館・うろこの家（旧

ハリヤー邸）、海岸ビル、富永家住宅の主屋と付属屋（東灘区）、など十件だった。いずれも神戸を代表する洋館である。

また明治三十三年（一九〇〇）に建造された日本最古の重力式ダムである市水道局の布引五本松えん堤（中央区の布引ダム）、

千苅えん堤（北区）・烏原立ヶ畑えん堤（兵庫区の烏原ダム）、川崎重工業神戸工場第一号ドック（中央区）、など有数の産業遺跡も登録された。これだけでも古澤家住宅の価値の高さがうかがわれる。

また平成二十一年には「ひょうごの近代住宅一〇〇選」にも選ばれた。神戸・阪神地域に残るデザインの優れた洋館を地域づくりに生かすと県が定めたものである。住民から推薦があつた二三〇件の中から県住宅審議会小委員会（委員長＝小森星児・神戸山手大名誉教授）が選定した。東灘区では古澤家住宅以外には旧乾家住宅・香雪美術館・富永家住宅・旧高嶋家住宅・翠嵐房が含まれている。

さらに平成二十三年には神戸市の「景観形成重要建築物等」



写真10 ラディンスキー邸